

《書評》

J. I. イスラエル著『オランダ共和国と  
スペイン帝国, 1606-1661』

Jonathan I. Israel:  
*The Dutch Republic and Hispanic World 1606-1661*,  
Clarendon Press, Oxford, 1982.

栗原福也

本書はF.ブローデル著「フェリペⅡ世の時代における地中海および地中海世界」に扱われた時期に続くフェリペⅢ世（1598～1621）、Ⅳ世（～1665）の時代を対象とする。ここでブローデルに言及したのは著者が序文冒頭につきのように述べているからである。すなわち構造、長期的変動、社会・経済的趨勢の新史学は、*histoire événementielle* つまり政治と軍事の叙述である旧史学が歴史学研究において長く占めてきた確固たる地位を揺がすことはなかった。現在の動向は新旧二つの研究対象領域が内面的関連づけをなされないままばらばらに叙述されているに過ぎないと。このように著者はアナル派が社会・経済構造の長期変動と関連させないで政治・軍事史の叙述を行うことを批判し、返す刀で社会・経済史に関心を示さない政治・外交史家の視野の狭さを指摘して、近世初頭において、スペインおよびオランダの政治的軍事的な政策決定とその結果がしばしばヨーロッパとアジア、新大陸の経済の長期変動の決定要因であったと主張し、政治史と経済史の統一を主張する。

さて本書の扱う時代は17世紀前半であるが、1609年スペインとオランダのあいだに結ばれた12年間の休戦条約の期限が切れて戦争が再開された1621年からミュンスター講和（1648）までの時期にとりわけ焦点が置かれる。すでに1606年からスペインにもオランダにも国内に講和への動きがあり、両国は講和に向けてひそかに接触を始めたが、結局は講和に至らず、休戦条約が成立した。両国の講和への模索は戦争再開後も絶えることなく続けられたにもかかわらず、両国間にはほぼ20年の長期間にわたる交戦が続いたのである。1606年すでにフェリペⅢ世が北ネーデルラント（オランダ）の放棄を決意したことは明白であるのに講和は実現せず、両国は何故50年ものあいだ国力を消耗する長い戦争をひたすら続けたのだろうか。しかも両国の戦争は全ヨーロッパの政治と外交の展開に決定的な影響

を与えたばかりでなく商業・工業・農業の発達を促した基本的要因ともなった。

17世紀前半、見識あるスペイン人は自国の経済的社会的衰退に心を悩ませており、衰退の一因である対オランダ戦争の講和を望むのは当然であった。他方オランダ側も自国の経済的繁栄が海上貿易という脆弱な基礎のうえに築かれたものであり、オランダがその繁栄を嫉視する大国にとりかこまれている小国に過ぎないことを承知していたに違いない。にもかかわらず講和は実現せず戦争が長期化したのはこの戦争がスペイン、オランダ両社会の中にある深い欲求と志望に発しているからだと著者は言うのである。

本書の内容の章題は以下の通りである。

I レルマ、オルデンバルネフェルトと挫折した平和の模索、1606－1617、II 休戦期限の終了、1618－1621、III スペインの攻勢、1621－1625、IV オランダの反攻、1625－1633、V 手詰まり状況、1634－1640、VI 最後の闘争、1641－1648、VII 講和後1648－1661、VIII エピローグ、1660年代

まず、1609年の休戦条約締結に至るまでのスペイン側の事情についてみよう。フェリペII世の治世が終わるころ（1598年）、ロンドンからイスタンブール、リスボンからストックホルムに至るまでの政治家も外交官もスペインとオランダの戦争をヨーロッパ政局の焦点と考え、ネーデルラントをヨーロッパの政治、金融、経済の心臓部と見做していた。にもかかわらずネーデルラントという局地的な戦闘にとどまっていた両国の戦争は、1589年以後、史上最初の地球大の戦争へと急速に拡大した。言うまでもなくこの時期に、オランダは突如としてアジア、カリブ海、アフリカ西岸に進出し、戦略的にはスペイン帝国の弱下腹部と言えぬ植民地に攻撃をしかけ、そのことによって経済的繁栄と一大植民地帝国を築こうとし、スペイン側はオランダの海外進出を食いとめるためには是が非でもオランダ本国を軍事的に制圧して勢力を弱める必要があった。スペインにとって、1598年イギリスと、1604年フランスとのあいだに講和が成立したいまこそ、オランダ攻撃の好機であった。

他方、長い戦争でスペインの財政は危機的状態にあった。そのうえオルデンバルネフェルトの政治指導とマウリッツの軍事指揮のもとに台頭した新国家オランダは経済的にも軍事的にも驚異的な発展を遂げていた。共和国は貿易、海運、金融、工業においてヨーロッパの中心になろうとしていたし、農業はヨーロッパの最先進地帯であった。加えて網目状に発達した運河と堤防、堅固な市壁と濠に囲まれた諸都市と要塞、さらにラインとマースの二大河はスペイン軍の攻撃に対する防衛を容易にしていた。

このような情勢の中で1607年4月両国の停戦協定が成立し、多くの曲折を経ながらも、英仏の仲介もあって、1609年4月アントウェルペンにおいて12年間の休戦条約が締結されたが、両国の指導者は休戦よりもむしろ講和への志向が強かった。1598年以来南ネーデルラントはフェリペII世の娘イサベラとその夫であるハプスブルク家のアルベルト大公の統治下であり、従来歴史家たちは自国領土の平和を望む両人が嫌がるスペイン宮廷を動かして対オランダ休戦を推進したと考えてきたが、実際には、対オランダ平和政策のイニシャティブをとったのは初めから終わりまでフェリペIII世の側近第1号である寵臣レルマ公だった。フ

フェリペとレルマ公はオランダ人がアジアを新大陸から完全、無条件に撤退することを条件にオランダの自由と独立を承認してもよいと考えた。オランダはアジアにおいてアンボynaを占領し、テルナテ、ティドール両島を侵略して香料諸島を実質的に支配し、西アフリカのギニア海岸と活発な貿易を続け、カリブ海域では1598年以来ベネズエラ海岸のプンタ・デアラヤに塩田を開始し、アマゾンとオリノコ両河口のあいだにゼーラント人のコロニーを点点と築いていた。スペインにとってはオランダ人がこれらの地域に勢力を扶植しないままのうちに、早急にオランダ人に手をひかせることが必要だった。

アルベルト大公、在南ネーデルラントのスペイン軍総司令官スピーノラとオルデンバルネフェルトのあいだで1609年4月に結ばれた停戦協約にはオランダ勢力のアジアからの撤退については明文化されていなかった。フェリペもレルマ公も大いに怒ったが、レルマ公が秘密裡に進めた対オランダ休戦にスペイン宮廷におけるレルマ公の反対派はいっそう衝撃を受けた。オルデンバルネフェルトはその前年（1606年）に着々と準備が行われていた西インド会社の創設を凍結し、さらに東インド会社も解体してもよいと考えていたが、東インド会社の大株主たるアムステルダムの大商人たちの激しい反対にあって会社解体を断念した。1608年2月講和に向けて両国の交渉は再開され、スペイン側はオランダの東西インドからの完全な撤退を迫ったが、オルデンバルネフェルトはこれに応じず、交渉は決裂した。しかし1590年代以降スペインの王室財政は危機状態にあり、1606年には南ネーデルラントのスペイン軍への給料不払いによる傭兵の暴動が生じている始末で、国王もレルマ公も戦争続行を望まず、同じくネーデルラントでの戦争を望まないジェームズI世とアンリIV世も両国の講和を支持した。ヴァレンシア出身のレルマ公は個人的にもまた、反対派である武断派のカスチリア貴族連中と異なり、国王とともに平和を志向していた。平和交渉は1608年秋再開され、翌年4月、ネーデルラントにおける両軍の陣地を固定したまま、また両インドにおいても現状維持を条件に12年間の休戦条約が締結されたのである。

## II

1606年以来レルマ公は北ヨーロッパと中央ヨーロッパに介入する伝統的なハプスブルク家政策の軌道を修正し、スペインの外交政策をいわばハプスブルク・コネクションから地中海圏における勢力確立と対イスラム攻勢の路線へと転換しつつあった。そのためには対オランダ平和と対仏講和が必要であり、ネーデルラントにおける威信の喪失を回復するためには早急に新政策に移行する必要があった。というのは当時、オスマン・トルコは東のペルシャ勢力の拡大に悩まされ、スペインの攻勢に対抗する余力がなかったからである。トルコ攻撃は対オランダ休戦に反対するカスチリアの好戦的大貴族の不満のはげ口となり、またイスラム教に対する国民の敵対感情を満足させることでもあった。フェリペIII世は北アフリカのスペイン勢力圏の軍隊を増強し、ジブラルタルに強力な艦隊を結集した。アントウェルペンで対オランダ休戦条約が締結された同日、フェリペが旧イスラム教徒であるモリスコの追放

令を発したことはスペインの対外政策における北方から地中海への転換を象徴する事件だった。1610年ジブラルタルに結集したスペインの大艦隊は北アフリカ沿岸に出動し、ララッシュ、続いてラ・マモラを占領し、さらにナポリ、シチリア、サルディニア、バレンシア、アングルシアのガレー船団は増強され、ナポリの副王オスナ公指揮下の艦隊はマルタ島沖、ギリシャ沿岸でトルコ海軍と会戦した。

結局、スペイン側は休戦条約締結の代償として東西両インドからオランダを撤退させることもオランダ国内におけるカトリック信仰を承認させることもできなかったが、レルマ公はフェリペの寵を失うことも反対派から失脚させられることもなかった。レルマは休戦後も講和実現を目指し、種々のチャンネルで密かにオルデンバルネフェルトと接触した。オルデンバルネフェルトはスペイン側の講和提案に対してははっきりした態度を示さなかったが、彼の地中海政策もまたスペインとの対決を避けて講和への可能性を残しておこうとするものだった。すなわちこの時期、オランダ商人の地中海進出はめざましかったので、トルコのスルタン（ムレイ・シダン）、ヴェネツィア、サヴォワなどから対スペインあるいは対ハプスブルク家の同盟や協力の申し入れが熱心になされたが、これに対し、オルデンバルネフェルトはスペインを刺激することを警戒して慎重に態度を保留した。

ところで休戦はスペイン、オランダ両国にどのようなインパクトを与えたであろうか。まず両国の軍隊が縮小され、南ネーデルラントの駐留スペイン軍は3分の1の約2万人、オランダは半分の約2万人に減少した。とはいえスペインでは地中海の海軍力増強のため減税が行われず、オランダの消費税率もほとんど低下しなかった。休戦により両国の貿易は盛んになり、オランダの穀物、木材、毛織物、銅などの輸出、スペインの農産物オリーブ油、ブドウ酒、西インド植民地産物とりわけ銀の輸出が増え、セビーリャの植民地貿易、ポルトガルの対オランダ塩輸出が活発化した。スペイン、イタリアを初め東地中海におけるオランダの貿易と海運活動はめざましく、地中海への輸出品を入手するためバルト海貿易が隆盛した。バルト海、スカンディナヴィアとの貿易の繁栄はアムステルダム港の未曾有の発達とアムステルダム近郊の造船業の繁栄を生んだが、これに反してマース河の港ロッテルダムやドルトレヒト、ゼーラントの諸港ミデルブルフ、フリシンゲンさらにユトレヒト、デルフトなどの諸港はむしろ停滞した。低関税政策は貿易には有利だったが、復活した南ネーデルラント毛織物業の競争によってレイデンやデルフトの毛織物業は不利な立場にあった。地中海、イベリア半島、南ネーデルラントへの穀物の流出は国内穀価の上昇を招き、高い消費税とともにオランダの民衆の生活を苦しめた。一方スペインにとってオランダを初めとする北ヨーロッパとの貿易の隆盛は輸入超過を意味し、植民地から流入する銀の大量流出を招いた。また北方からの穀物の流入は穀物価格を低下させ、スペインの穀作農民に打撃を与え、羊毛輸出の盛行は国内の羊毛不足と価格高騰によるスペイン毛織物業の衰退を生み、逆にオランダ、イギリスの毛織物を流入させる結果となった。休戦はスペイン経済の衰微と民衆の貧困を深刻にし、スペインの貿易の盛行をスペインの貧困の原因として告発し、保護主義を唱道する知識人を輩出させ、休戦反対勢力を増大させた。

1921年の休戦期間満了が近づき、休戦条約の延長か戦争再開かをめぐって熱い論争が始まったオランダ、スペイン両国でともに政変が起き、休戦・講和派の指導者レルマ公とオルデンバルネフェルトが退場した。オランダでは休戦以来、社会的、経済的に抑圧された大衆の怨念がカルヴィニスト説教師の説くスペインに対する徹底的抗戦を支持する方向に結集し、ことにハーレルム、レイデン、ハウダなどの工業都市においてはアルミニウス派の市統治者層への反抗、騒動が市民軍を中心に次第に激しくなっていた。ホラント州議会はこれらの都市の市民軍のなかの反抗分子を排除し、州の秩序維持のため各都市で傭兵を募集することを決定した。総督マウリッツは自己の指揮下に入らないこのような都市の傭兵軍を募集したホラント州会の決定と州会を支配するオルデンバルネフェルトに対して怒り、同じ休戦反対派のアムステルダム市長レイニール・パウと協力し、1618年8月オルデンバルネフェルトを逮捕し、翌年処刑した。マウリッツのクーデタによってオルデンバルネフェルトを支持する有力レントも追放され、オランダの休戦派勢力はここに没落した。あたかもオルデンバルネフェルトの逮捕と時を同じくして、ベーメンの叛乱によってドイツに暗雲がたちこめたとき、レルマ公はフェリペ三世の宮廷で孤立し、息子のウセダ公の企んだ陰謀で失脚した。この宮廷陰謀によって新たに権力の座についたバルタザル・デ・スーニガは1590年以来地中海とイスラムに向けられたスペインの対外政策を再び北に転じた。彼はベーメンに介入し、スピーノラをしてプファルツを占領させた。とはいえこの時点でスペインが断乎として対オランダ戦再開を決定したとは言えず、スペインがネーデルラントの軍隊と資金をドイツに差し向けたことは、ある意味では、休戦の延長の可能性を強化したとも言える。スーニガはまたドイツ問題に介入するうえでオランダとの休戦がスペインにフリーハンドを与えることを十分に理解していた。他方オランダでもオルデンバルネフェルトの失脚によって休戦派の勢力は弱まったとはいえ、戦争再開による課税の強化を恐れる者は少なくなく、また直接スペイン軍の攻撃にさらされている東部諸州を含むオーフェルエイセル、ヘルデルラント、ユトレヒト、フリースラント、フローニンゲンの五州は休戦の継続を強く望んでいた。したがって両国の休戦延長に向けての接衝は最後まで続けられたが、結局は時間切れとなり、戦争は21年8月再開された。

### III

再開された戦争においては、かのブレダの陥落（25年）が示すように、陸上戦においてはスピーノラ率いるスペイン軍が優勢だったが、次第に強化されたオランダ軍は総督フレデリックの指揮のもとに反撃に転じ、ついにはブレダを奪回（37年）したのみならず、東南部国境地帯のスペイン軍を撃退することに成功した。

他方スペインは陸上戦においては攻撃よりもむしろ防御に転じ、海上での攻撃すなわち経済戦争へと戦略を転換する。スペインは21年春からイベリア諸港へのオランダ商船の入港を禁止し、さらにその広大な植民地からオランダ船を排除しようとする。言うまでもなくオ

ランダの繁栄の源泉は海上商業と漁業にあったから、海上にあるオランダの商船隊と漁船団を組織的に攻撃して沈没させ、あるいは拿捕することはオランダに被害を与える最良の方法であった。のちにイギリスもまた同じように通商破壊によってオランダの富の源泉を破壊する戦略をとる。オランダの経済と国力は海上からの攻撃には脆弱だった。

オランダ側はスペイン貿易の中止によって失われた失地を回復するため、東インドにおける勢力を拡大し、1641年にはポルトガルの貿易拠点マラッカを占領して胡椒貿易を独占し、開戦と同時に設立した西インド会社はスペインの西インド船団を襲撃し、30年代に入るとブラジルを占領し砂糖プランテーションの建設を進めた。

スペインの海上攻撃に対してオランダ海軍の戦略は自国商船隊および漁船団の防衛とスペイン海軍および貿易の基地であるフランドルの沿岸を封鎖することであった。こうしてスペイン海軍とオランダ海軍は北海上で数次にわたる激しい海上戦を繰り返すことになった。英仏海峡を通過するオランダの漁船と商船にもっとも多く被害を与えたのはスペイン海軍よりも、ダンケルク港を拠点として活躍した私掠船だった。オランダ側では1637年トロンプがホラント州の海軍司令官に就任し、39年南ネーデルラント支援のためフェリペIV世の派遣した大艦隊を迎えうって壊滅的打撃を与えた。

1580年以来スペインに併合されていたポルトガルで1640年革命が起き、ブラガンサ公がジョアンIV世として国王となり、スペインの支配を脱してふたたび独立した。植民地ブラジルをオランダ人に征服されたことを怒り、対オランダ戦争の継続を主張するポルトガルが離脱したことはスペイン政府の対オランダ平和派に大きな力を与えた。1643年には1622年スーニガのあとを継いでスペインの指導者となった帝国主義的拡張主義者のオリバーレス公がカタルーニャ革命とポルトガルの独立と財政危機の中で失脚した。

戦争再開以来スペイン、オランダ両国は戦争を自国に有利に展開させるため、ヨーロッパと東西両インドで経済戦争を続ける。オランダ側はラインおよびスヘルデの河口を封鎖して南ネーデルラントへの輸出入を禁じ、あるいは高い関税をかけた。ただしこの処置はラインの沿岸・河口やゼーラント州の貿易港の激しい反対を呼び、アムステルダム商人はまた他のルートで南ネーデルラントへ大量の穀物や軍需品を売りこんだ。スペイン側はイベリヤ半島諸港へのオランダ船入港を禁止してオランダ貿易に被害を与えようとし、ことに植民地物産がオランダへ流出しないようにアンダルシア諸港への入港をきびしく監視した。これによってイギリス、ドイツ・ハンザ、デンマークの貿易が漁夫の利をえ、ことにハンザ諸港の活躍がいちじるしかった。なおシシリー、ナポリ、サルディニアではオランダ人の貿易・海運活動は禁止されなかった。

ところで1640年ごろを境としてスペインの西インド貿易の衰微が多くの史家によって指摘されてきた。スペイン領植民地を研究する歴史家たちによれば、メキシコ、ペルーからスペインへの銀の流入は1600年以降急速に減少したが、アメリカの銀生産量は1630年代末まで減少しなかったし、さらに17世紀の末になっても激しく落ちこんだ形跡はなかった。ではなにゆえスペインの対アメリカ貿易が衰微したのだろうか。これに関し歴史家たちはメ

キシコ、ペルーの経済的発展の結果、現地の自給度が進んだからだと言ひ、他の歴史家は北ヨーロッパ諸国の対アメリカ密貿易の盛行によってスペインの植民地貿易のシェアが減ったからだと言ひ、説明した。著者はこのような見解にはなんら確証がないとし、スペインの対植民地貿易の衰微の原因をスペイン・オランダ戦争に帰する。密貿易について言えば、スペイン植民地には多くの警備兵や役人が配置されており、密貿易取締りのため多くの有効な対策がとられたので、1621 - 48年の戦争期間中の密貿易は最小限に抑えこまれた。そしてメキシコ、ペルー銀のスペインへの流入が減少したのは、オランダ海軍や西インド会社の艦隊を防衛するための要塞や守備兵、軍需品に膨大な銀が投入されたからである。ことに辺境にあって、しかも経済的には必ずしも重要でない拠点で西インド会社の攻撃にさらされ易いハバナ、プンタ・デ・アラヤ、プエルト・リコ、トゥリニダード、マニラ、モルッカ諸島における要塞建設と維持に莫大な費用を要したのである。

スペインはまた対オランダ戦争遂行のため、植民地への課税を增強したが、このことはこの時期におけるアメリカ経済の長期的不況をいっそう激しくした。水銀の深刻な不足がポトシ、サカテカスの銀生産を減少させた。西インド会社によるスペインと植民地を結ぶ大西洋シーレーンの破壊は砂糖プランテーションへの黒人奴隷の供給を妨げ、奴隷価格の高騰とプランテーション労働者の不足を起こした。グアテマラ、ホンジュラスのインディゴも東インド会社がアジアから運んだインディゴにヨーロッパ市場を奪われた。対スペイン貿易の衰退によって、植民地の関税収入も激減した。母国スペインの船材不足による大西洋船団の不足、植民地へ再輸出すべき北ヨーロッパ商品の不足もすべてその原因は対オランダ戦争に起因した。

1644年スペインは講和会議の代表をミュンスターとオスナブリュックに送った。オランダではゼーラント州の講和反対で、代表派遣は最後までもめ、46年ついにゼーラントを除く6州それぞれの全権代表がミュンスターに到着し、領土、植民地問題をめぐって交渉を続け、48年5月講和条約が成立した。

最後に著者は1606年以降のスペイン、オランダ戦争の意味はなんであったかと問う。宗教はときに口実とされたが、両国の切実な関心は宗教にはなかった。この戦争で争われたものはハプスブルク家の優位確保の企図とそれに対する抵抗という国際的な力の均衡の問題だった。もっともオランダはスペインと異なり、必ずしもこの問題を意識しなかった。スペインは、ことにオリバーレスの失脚以後、当時次第に拡張傾向をみせていたフランスに対するフリーハンドをえるため、植民地を含む貿易上の利益をオランダにえさせてもなおオランダと和を講じることを決断した。しかしながら、戦争期間を通じて両国の真の関心は経済的利害、植民地問題であった。ただし両国とも講和と戦争をめぐって国内的な利害の衝突があった。オランダ側は貴族、市民、農民、手工業者の利害が分裂し、講和はゼーラント、南ホーラントの工業諸都市の犠牲において、アムステルダムの繁栄の絶頂期を実現した。スペイン側でもカスチリアの大貴族、南ネーデルラント、ポルトガル、宮廷、官僚、軍隊などの利害が複雑に錯綜していた。

本書の内容についてやや詳しく述べたが、著者はスペインとオランダ両国の政治、軍事史に加え経済史について精通しているだけでなく、多くの問題について独自の見解を呈示している。1640年代以降のスペインの対植民地貿易の衰退の原因に関する新見解についてはすでに述べたが、ここではスペインの没落に関する著者の見解を述べて本書の紹介を終えたい。一般にスペインの没落の原因に関しては貿易収支のインバランス（輸入超過）、工業の衰退（国際競争力の喪失）、農業（穀作）の衰微、重税が挙げられるが、著者によればこのようなスペインの弱点は17世紀になって始ったわけではなく、すでに15、16世紀から存在し、にもかかわらず15、16世紀のスペイン経済の持続的拡大を妨げなかった。スペイン没落の真の原因は1600年以降始った北ヨーロッパの工業製品、農産物の突然の大量流入によって被ったスペイン工業・農業の衰退である。16世紀の後半、オランダ独立戦争によってフランドル毛織物業が荒廃し、またユグノー戦争によって北フランスの毛織物業が衰微し、また対イギリス戦争が続いた結果、これらの地方の毛織物がスペインに流入しなかったことがスペイン工業に幸いした。レルマ公の平和政策、ことに対オランダ休戦によって北方の産物が国内に氾濫したが、比較的短い期間ののち1621年ふたたび流入は激減した。そしてミュンスターの講和による外国商品の洪水と羊毛輸出の激増がスペイン没落の真の原因になったのである。

◀ RÉSUMÉ ▶ BOOK REVIEW

JONATHAN I. ISRAEL:  
*THE DUTCH REPUBLIC AND THE HISPANIC WORLD, 1606-1661*  
 Clarendon Press, Oxford, 1982

Fukuya KURIHARA

Jonathan I. Israel, the author of this book is a Lecturer in Early Modern History at University College London. He is also the author of *'Race, Class and Politics in Colonial Mexico'* (Oxford Historical Monograph).

The subject of this excellent book is the Dutch-Spanish struggle from 1606 to 1648, which evolved into the world's first global conflict, and exerted a profound influence on the entire relationship between Europe and the east and west Indies. He has handled military as well as political and economic aspects of the struggle on both sides.

The author has made the most important contribution to the European history of the seventeenth century, and his book will be indispensable for those who are interested in this period.